昭和初期の新宿

学童疎開（がくどうそかい）

みなさん、疎開という言葉を聞いたことはありますか。これは太平洋戦争の時に作られた言葉といわれています。普通に言えば避難ということですが、戦争中に避難（ひなん）という言葉を使えば、逃げているという意味になるので、疎開といったようです。

昭和 19 年（1944）、アメリカを中心とした連合国軍（れんごうこくぐん）の空襲（くうしゅう）がはじまると、日本政府は東京、横浜、名古屋、大阪など大都市の小学生（この時は国民学校）を疎開させることに決めました。新宿区域の小学生も集団で疎開をしました。これが学童疎開です。

新宿区域では昭和 19 年から太平洋戦争が終わった後の昭和 21 年（1946）の間に、栃木、福島、山梨、茨城、群馬に疎開しました。その数はおよそ 13600 人、受け入れたのは、寺院 118、旅館 138、学校等 4、民家 2 の合計 262 ヶ所でした。

親元から離れ、食べ物は少なく、シラミや皮膚病（ひふびょう）に悩まされたという生活を皆さん想像してみてください。子供たちも、受け入れた人たちもたいへん苦労しました。

群馬県吾妻郡に疎開した淀橋地区（現新宿区の西部地域）の児童が現地の草津小学校との交換会で一堂に集まったところ。昭和 20 年（1945）9 月 10 日

疎開児童の食事
群馬県草津町田村屋旅館　淀橋第一国民学校

市谷国民学校（現新宿区立市谷小学校）
疎開記念湯のみ 昭和 20 年（1945）9 月 10 日

「学童疎開」新宿に住んだ堀潔さんの水彩画